# 千葉県

## 研究協力校(課程又は障害種)

- · 千葉県立君津特別支援学校(知的)
- · 千葉県立夷隅特別支援学校(知的)

# 研究の成果

#### 観点 1:

各モデル事業内、及び近隣自治体間における概念(用語)の共通理解・合意形成

#### |-|. 研究の目的

千葉県では、研究協力校 2 校で異なる研究テーマや目的を設定し、実践研究に取り組んだ。まず、千葉県立君津特別支援学校(以下、「君津」)では、知的障害のある児童生徒への学習評価について、現行の特別支援学校学習指導要領に基づき、教育課程を編成して、一人一人に個別の指導計画を作成し、目標、手立てに照らし合わせた評価を実施している。各教科等を合わせた指導の評価については、児童生徒の意欲や態度により判断する部分が多く、各教科等の内容に基づいているにもかかわらず、「何を学習し、何ができるようになったのか」という説明が十分とはいえない状況にあり、各教科等の目標に準拠した評価の観点による学習評価を行うことが課題となっている。

これらのことを踏まえ、「君津」では各教科等を合わせた指導について、各教科等の内容や評価の観点の明確化を図り、効果的な指導方法について研究することとし、研究テーマを「知的障害のある児童生徒の質の高い学びを実現するために必要な学習指導と評価の在り方」と設定した。

千葉県立夷隅特別支援学校(以下、「夷隅」)では、これまでも特別支援学校においては、 キャリア教育の全体計画を作成して取り組んでいるところであるが、本研究を通して、各学 部内で指導する各教科間の関連性(各教科や領域等でキャリア教育と係わる主な事項を明 らかにするなど)や校内における各学部間のつながり、家庭や地域との連携の在り方等につ いて、更に検討することが課題として明らかになった。

そこで、本研究では、キャリア教育に係わる各教科間の関連性や、校内における各学部間のつながり、家庭・地域や産業現場との連携の在り方などについて検討し、小学部段階から連続したキャリア教育を推進するための教育課程の編成や指導方法等を明らかにすることを目的とした。

#### 1-2. 校内研修による共通理解(「君津」)

「君津」は大規模校ということもあり、平成 29 年度は研究を進めるにあたって教師間の 共通理解を図ることに着手した。

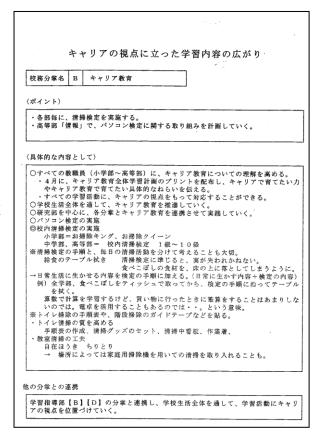
校内研修では、筑波大学附属大塚特別支援学校 中村晋氏より「~各教科・領域を合わせた指導について~戦後の教育方法史から今日的課題まで」というテーマで「各教科等を合わせた指導の歴史と特徴」「各教科等を合わせた指導の課題」について、助言を受けた。また、文部科学省初等中等教育局視学委員特別支援教育調査官(現神戸親和女子大学准教授) 武富博文氏から、新学習指導要領の改訂のポイントについて助言を受けた。これらの研修により、次年度行う研究への共通理解ができ、各教科等を合わせた指導における関連する各教科等の内容を意識した授業づくりや児童生徒のつけたい力を観点とした学習評価に加え、単元の評価(教師の評価)の必要性等、次年度の研究で目指すことが明確になった。

### 1-3. 校務分掌の活用をはじめとした学校全体で共通理解を進める取り組み(「夷隅」)

「夷隅」では、小学部から高等部までの 全教育課程を通して取り組むために校務 分掌の組織を活用した。分掌ごとにどの ような学習活動が考えられるか、月 ー 回 の校務分掌会議でアイデアを出し合っ た。校務分掌会議を中心に検討を進めた ことで、各学部の立場から意見交換をし、 教員一人人がキャリア教育について考 える機会となった。また、生徒指導、保健 指導、給食指導等の指導部門のつながり ができ、「なぜ、なんのために」が明確に なるなど | 本の柱ができた。

校務分掌会議等で話し合った取組を「キャリアの視点を取り入れた学習活動の工夫」(資料 I) としてまとめ、小学部から高等部までの各学齢期に応じた学習活動を「各学部と連携・継続した支援」(資料 2) として整理することができた。

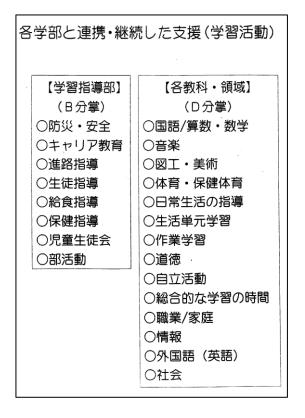
次年度以降の課題として、授業づくり に焦点を当て、小学部、中学部、高等部の つながりを意識しながら、各学部段階で

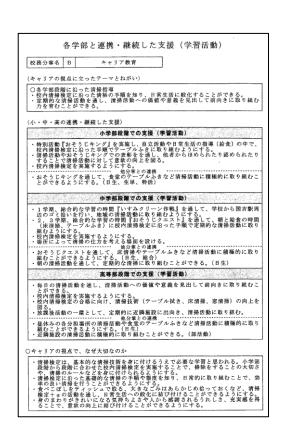


資料 I キャリア教育の視点に立った 学習内容の広がり

整理した学習内容を実践していくこと。実践する際には、平成 29 年度に作成した「各学部 と連携・継続した支援」を活用するとともに、児童性の子に応じたねらいや手立てを明確に して取り組んでいくこと。さらに、授業を振り返り改善していくためのサイクルや児童生徒 それぞれの評価方法を検討し、キャリア発達を引き出すための授業が展開できるようにし ていくことが挙げられた。

このように、各校務分掌で検討した内容を教員間で共通理解し、学校全体で実施した。役割をもって活動する取組を通して、自分から進んで活動する姿が見られたり、目的をもって取り組む姿が見られたりした。





資料 2 各学部と連携・継続した支援(学習活動)

#### 観点2:

教育課程・個別の指導計画の実施状況とその評価

#### 2. 教育課程研究協議会の開催(「君津」)

「君津」では、教育課程研究協議会を平成30年1月と3月に実施した。教育課程研究協議会委員を校外から6名依嘱し、「君津」の研究について指導・助言を仰いだ。平成30年3月の教育課程研究協議会において、平成29年度の研究の成果と課題、平成30年度の方向性について、評価を行い、平成30年度は学部のつながりを意識した取組へとつなげた。

## 観点3:

# 個のニーズにあわせた指導法、学習環境・支援の工夫

## 3-1. 評価の観点設定による目標の明確化・手立ての工夫(「君津」)

「君津」では、評価の観点を明確にする取組をした。中学部では、実態把握表(資料 3-1)と評価規準表(資料 3-2)を作成した。評価の観点を「育成を目指す資質・能力の 3 観点」とし、発達段階ごとに目標や内容を整理した。実態把握表や評価規準表で教師間の共通理解が図られ、手立ての工夫について話し合ったり、授業改善につながったりした。

音楽	評価の観点													
歌唱	ても歌えな		覚えたとこ う (音程△		覚えたところを 歌う (音程○)	好きな歌のと む (音程○)	きにロずさ	自分なりに全 音程△)	さて歌える(	伴奏に合わせる(音程△)		伴奏に合わる る(音程〇)		
	い)) 関、表・思	る) 関、表・思	関、知、表		関、表・思、知・技	関、表・思		関、表・思、	知・技	関、表・思、	知・技	関、表・思	、知・技	
歌唱	歌いたくない (恥ずかしい) (自信がない) (好きな歌じゃない)		友だちや教師と一緒に一部を歌う			友だちや教師と一緒にだ いたい歌う		友だちや教師と一緒に全 て歌う (ささやき声)		友だちや教師と一緒に全 て歌う (聞こえる声)		友だちや教師と一緒に全 て歌う (大きな声)		
観点	点 関		関			開		関		関		関		
器楽	い (興味がな	れば楽器を	言葉をか ければ手 に取り、少 し鳴らし て投げる				て鳴らす・止	で一部リズ ム打ちをす	でだいたい	教師の支援 で全部リズ ム打ちをす ることがで きる	リズム打ち	一人でだい たいリズム 打ちをする ことができ る	リズム打ち をすること	
観点	関	関	関、表	関、表	関、表	関、表・思	関、表・思	関、表・思、 技	関、表・思 、技	関、表・思、 技		関、表・思 考、知・技		
身体 表現	人の様子を見	ている		教師が働きかけると一部真似できる 曲を開きつつ一部合わせる 曲を開きつつ全部合わせる		8								
観点					関、表	関、表			関、表・思、知			関、表・思、知		

# 資料 3-1 実態把握表

参考 中学部 音楽科 Aグループ 評価規準と基準(2学期)』 題材名「合奏をしよう」

		学びに向かう力・人間性等(音楽への開心・意欲・極度)。										
		知篇	思考力・判断力・表現力等。									
		(鑑賞の能力	(音楽表現の創意工夫)。									
		− 乗器の音色や曲の雰囲気		(合書)								
		を知る。	の向き、足の開き)を身に	・伴奏に合わせて、楽器で表現す								
			付ける。	ð								
意		"本時:鑑賞曲を聴いて、	本時:敏節の言葉かけで	本時:伴奏を聴いて、自								
		その雰囲気を発表	駅う姿勢をとる。	一 分のパートを演奏								
		したり、選択肢か		* # 3								
		ら遊んだりする。	i i									
			11,	A								
		■・曲 の特徴や変化につい	で、眩・歌う姿勢のうちすべてをと	・全体練習(刺激 の多い集団)								
		自分から発言する。。	ā	、 周りに合わせて演奏する。								
	à.		ļa.									
			-									
	.5	4	ia .	4								
		一曲の特徴について、数6	₹	・パート練習(刺激の少ない小魚								
	.1	が提示したものの中から	5. a.	団)で、周りに合わせて演奏:								
£	Ę	適切なものを選ぶ. 。	-	ð								
Ē.	-		-	4								
			-									
			14	A								
		畑 ・曲を聴いて、表情を変		・伴奏を聴いて、自分なりに演る								
		えたり、声を出したり:	7 3. ·	する								
	ą	3. ·	-									
			_									
			-	4								
			1.	a .								

資料 3-2 評価規準表

## 3-2. 個に合わせた振り返り(「夷隅」)

「夷隅」では、児童生徒自身がわかりやすい方法(実物、動画、写真、イラスト、ことば)を用いて振り返り(評価)を行った。例えば、中学部の日常生活の指導「清掃検定」や小学部の生活単元学習では、がんばったことについて文で記述するだけでなく、本人が実際に頑張っている様子の写真を賞状やメダルに掲載し、児童生徒が自分の頑張りがわかるような工夫をした。

ことばで表現することが難しい児童生徒に対しては教員が言語化して返した。また、表出が難しい児童生徒にはドロップスのイラストや、DropTalk・vocaco といったアプリを利用した(資料 4)。



資料4 イラストによる振り返り

## 観点4:

障害のない幼児児童生徒・地域社会との交流及び共同学習の設定

記載なし。

## 観点5:

多面的な視点からの学習評価・授業評価・学校評価の実施

#### 5. 評価規準やアセスメントシートを用いた複数の教員による評価(「君津」)

「君津」では各教科や各教科等を合わせた指導において、育成を目指す資質・能力の3つの柱を評価の観点として評価表の作成に取り組んだ。チェック項目を作成することで、指導内容や手立てが具体的になり、児童生徒の変容がわかるようになった。